

カラッチ一族によるカーザ・サンピエーリ＝タロンの Fresco 作品群 ——その図像プログラムに関する一考察——

山本 樹（東京藝術大学）

16世紀後半、ポローニャで頭角をあらわした画家一族カラッチ（ルドヴィーコ、アゴスティーノ、アンニーバレ）は、その共同制作活動の後期に当たる1590年代前半、市内中心部の邸宅カーザ・サンピエーリ＝タロンのための居室装飾に取り組んだ。1階の隣接する三つの居室の天井および暖炉上に描かれた計6点の Fresco 画は、ポローニャにおけるカラッチ一族の活動の最後の様相をものごたる。

カラッチ一族によるポローニャ時代の共同制作に関しては、パラッツォ・ファーヴァおよびパラッツォ・マニャーニという二大プロジェクトが主たる研究上の関心の焦点となり、その他の作品群はやや等閑視される傾向にある。サンピエーリ家の作品群についても、その歴史的経緯と図像解釈を概略的にまとめたエウジェニオ・リッコーミニの小冊子(2006)を例外として、本格的な議論はほとんどなされていない。本発表はこうした研究状況に鑑み、本作品群の図像プログラムに関するより詳細な読解を試みるものである。

プログラム全体は暖炉上の3点《ヘラクレスとカークス》《雷に撃たれるエンケラドス》《プロセルピナを捜すケレース》および、天井部の3点《アトラスに代わって天を支えるヘラクレス》《美德に導かれるヘラクレス》《ユピテルによって天に迎えられるヘラクレス》によって構成される。各図像の造形性に着目すると、一部にヴェネツィア派からの影響が認められ、また第2室暖炉上に描かれたエンケラドスは、マントヴァでジュリオ・ロマーノが描いた巨人族の崩壊の様子を想起させる。こうした先行作品を範例ととらえることで、サンピエーリ家の作品群全体の構想にも、天上への上昇と地下への下降という対照的な上下構造を見出しうる。

一方、意味解釈に関しては、各作品に添えられたラテン語の銘文の一部が、古代文学に典拠を持つものであると指摘されている。この銘文は天井の3場面では主人公ヘラクレスが難業を成し遂げ、美德によって導かれ、至高天へと到達する段階的テーマに対応し、一方、暖炉上の3場面では悪徳に対する懲罰や冥界への降下を示唆する。従来、漠然と「悪徳の象徴」とのみ称されてきたカークス、エンケラドス、およびプロセルピナの掠奪者プルートルという暖炉上の異教主題は、発表者の考えでは、ダンテ『神曲』地獄篇およびその註解書を通じて読み解きうる。ダンテによれば、彼らはそれぞれ〈貪欲〉〈高慢〉〈邪淫〉のメタファーであり、教訓化された異教神話であると解釈される。

カラッチ一族が活動した16世紀後半のポローニャは、大司教ガブリエレ・パレオッティの主導によって、美術をめぐる道徳的コードが問い直された場であった。サンピエーリ家の装飾で示された力強い様式は、キリスト教的寓意を託された異教主題の表象にふさわしく、対抗宗教改革時代の思潮に呼応した理念的図像プログラムを実現しているのである。